

菊水町文化財調査報告 第10集

岩 尻

1987

菊水町教育委員会



菊水町文化財調査報告 第10集

岩 尻

1987

菊水町教育委員会

序 文

今年度の調査は、菊水町岩尻辻原地区を中心に実施いたしました。調査の結果は、本文にありますように、期待していたほどの成果をあげることができなかったようです。この岩尻辻原地区からは、若干の石器が出土しましたが、その出土地点周囲が良好な包蔵地と言えるかとなると、やはり答えは否としか言えないようです。しかし、わずかではありますが、遺物が存在したという事実は、辻原地区を含む周辺一帯のどこかに包蔵地がある可能性を暗示するものです。

諏訪原遺跡と松坂原遺跡の両地区は、今年に限らずこれまでも機会あるごとに調査を実施してきた最重要地区ですが、今年の調査においても多くの新たな知見が得られました。

昭和53年度から本年度までの9年間、国庫補助をうけながら菊水町の調査を続けておりますが、この間に多くの新しい情報が得られております。本年度を含め、これらの成果が多方面にわたり活用されることを願うものです。

調査にあたり、多数の方々にご協力いただきました。茲に厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月31日

菊水町教育長 坂 口 三 男

例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡菊水町における昭和61年度埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は昭和61年5月より昭和62年3月における国庫補助事業として、菊水町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は池田道也が担当した。
4. 本書に使用した図の作成は、居石裕臣、池田道也が主に行った。製図は池田道也が実施した。
5. 本書の編集は、池田道也が担当した。

調査組織

調査主体	菊水町教育委員会
調査責任者	坂口 三男（菊水町教育長）
調査員	池田 道也（菊水町歴史民俗資料館学芸員）
事務局	坂本 一（菊水町教育委員会事務局長） 福永 光隆（菊水町文化課係長） 堤 郁子（菊水町文化課主事）
調査指導	桑原 憲彰（熊本県文化課参事）
作業員	宮本 毅・大久保八百記・小林ツヨミ・ 中山 圭一・北山ハツ子・長木 隆弘・ 坂口 圭介・坂本 淳・居石 裕臣・ 坂本 由美・小林 亜紀・多賀 清美・ 池田 英臣・田上ツヨメ・田上カヲル・ 甲斐村至伝・福永フジ子・福永代志美・ 福原 織江・井上 勝輝

本文目次

一、調査区の位置と環境	1
二、調査の目的・方法	2
三、調査概要	2
四、ま と め	8
◎菊水町出土人骨の鑑定結果について	10
北赤穂原石棺人骨	10
柳林1号人骨	11
若園貝塚1号人骨	12
若園貝塚2A人骨	13
若園貝塚2B人骨	14
若園貝塚出土散乱骨	14
堂ノ上塚棺人骨	15

挿 図 目 次

第1図 昭和61年度調査地区位置図	16
第2図 岩尻調査地区位置図	17
第3図 調査地区位置図	18
第4図 松坂原遺跡調査トレンチ位置図	19
第5図 岩尻辻原地区層序断面図	20
第6図 諏訪原遺跡地区層序及び遺構・遺構断面図	21
第8図 遺物実測図	22
第9図 遺物実測図	23
第10図 遺物実測図	24
第11図 遺物実測図	25
第12図 遺物実測図	26
第13図 遺物実測図	27
第14図 遺物実測図	28
第15図 遺物実測図	29
第16図 遺物実測図	30
第17図 遺物実測図	31
第18図 遺物実測図	32
第19図 遺物実測図	33

図 版 目 次

図版 1	岩尻辻原地区第 1 トレンチ	37
図版 2	岩尻加武生古墳参考地	39
図版 3	諏訪原遺跡遺構・遺物検出状態	41
図版 4	諏訪原遺跡遺構検出状態	43
図版 5	松坂原遺跡層序検出状態	45
図版 6	遺物写真	47
図版 7	遺物写真	49
図版 8	遺物写真	51
図版 9	遺物写真	53
図版 10	遺物写真	55
図版 11	遺物写真	57
図版 12	遺物写真	59
図版 13	遺物写真	61
図版 14	遺物写真	63

そ

つ
れ
が

良
棺

が
っ
わ
可

接
生
れ

(
|
の|
い

昭和61年度埋蔵文化財発掘調査報告

一、調査区の位置と環境

本年度の調査は、菊水町岩尻区を中心に実施した。本年度の調査対象地区は次の通りである。

- ①岩尻辻原地区（第1図・2図参照）
- ②岩尻加武生古墳参考地（第1図・2図参照）
- ③諏訪原遺跡地区（第1図・3図参照）
- ④松坂原遺跡地区（第1図・3図・4図参照）

岩尻区は、町北部のなかほどに位置し、同区内を東西に県道16号線（玉名―山鹿線）が通っている。また同区の北方には、志口永・下津原の台地が広がり、さらにその北側には、これらの台地を大きく囲むように菊池川が流れている。岩尻区的地勢は山がちで、山林・畑地が多い。

岩尻区の周囲には、前出の志口永や下津原の台地のほか、東方に古閑原台地などがあり、良好な埋蔵文化財包蔵地が広がっている。また、南東の方位にある高野区からは、柳林カメ棺群や本村遺跡（住居址など）が近年発見されている。

①岩尻辻原地区

岩尻区を調査する契機となったのは、岩尻区の辻原という所から、土器の細片や磨石などが耕作中に発見されたことである。さらに、同区の周辺には良好な埋蔵文化財包蔵地が広がっているにもかかわらず、同区一帯は、今まで埋蔵文化財的な見地からは、何の留意もはらわれておらず、耕作などによる攪乱が十分予想された。しかし、広大な包蔵地が眠っている可能性も高いと推定されたため、この辻原を皮切りに調査を実施した。

②加武生古墳参考地

加武生古墳参考地は、辻原地区から南へ250mの地点にあり、地目は墓地となっている。隣接して江戸時代の墓地があり、現地にはそれらしい墳丘が認められ、その上には竹・雑木が生い茂っていた。また、墳丘の片隅には三の宮神社という銘が刻まれた小さな石塔がまつられていた。

③諏訪原遺跡地区

諏訪原遺跡という呼称は、諏訪原台地上にある遺跡の総称として現在用いているが、今回の調査地区は、小字名も諏訪原といい、隣接して札木カメ棺墓が発見された地区があるなど、いわゆる諏訪原遺跡の中では、やや台地の西寄りに位置してはいるものの、中心部とも言う

べき所である。また、多数の居住址群が発見された菊水インターチェンジ帯(昭和44年～45年調査地区)からは、南へ約300mの所に位置している。

④松坂原遺跡地区

松坂原遺跡の調査は、今回で6度目である。今回は、昨年調査を実施した部分のすぐ東側にトレンチを1本設定したのみである。昨年調査した部分が、かなり良好な埋蔵地であったため、さらに東側への広がりを確認する調査であった。松坂原遺跡の位置は、これまでに何度も述べているため、ここでは省略する(菊水町文化財調査報告書第3～9集を参照のこと)。

二、調査の目的・方法

調査の目的は、岩尻辻原地区については包蔵地の有無の確認を主目的とし、さらに包蔵地が確認できた場合は、その分布の把握を行うことであった。岩尻加武生古墳参考地については、まず古墳であるか否かの確認、および地形図の製作、諏訪原遺跡地区については遺構・遺物の検出・さらに松坂原遺跡地区については、やはり諏訪原遺跡地区と同様、遺構・遺物の確認を行うことであった。

- ①岩尻辻原地区……2×10mのトレンチを3本設定開掘した。層序を識別することで、遺物包含層の有無の確認。
- ②岩尻加武生古墳参考地……地形測量後、全面に放射状に延びる幅1mのトレンチを6本設定開掘した(主体部の確認)。
- ③諏訪原遺跡地区……5×5mのグリッドを20面設定し、開掘したのは6面である。居住址を中心とする遺構の確認。
- ④松坂原遺跡地区……2×7mのトレンチを1本設定開掘した。昨年調査した部分から東方への包蔵地の広がりを主に調べる。

三、調査概要

次に調査区ごとに調査結果の概要を述べる。

①岩尻辻原地区

当地区は、耕作中に土器片や石器が採集されていることもあり、良好な包蔵地である可能性が高いと考え、本年度の中心的調査区としていた所である。現況は桑畑として利用されている部分が多い。トレンチ設定の場所は、調査のやり易い畑地を設定した。結果は、トレンチを設定した部分からは、包蔵地を確認するには至らず、遺物もきわめて貧弱であった。さ

らに、前年ゴボウを耕作していたため、深さ1mにおよぶ幅20cm程度の細長い溝が多数走っており、著しい攪乱を被っていた。

◎層序（第5図参照）

基本的にはⅠ～Ⅳ層に分けられる。

Ⅰ層……混砂黒褐色土層。

耕作土層で、著しい攪乱をうけている。各時代のさまざまな遺物の細片が含まれている。

Ⅱ層……暗褐色土層。

攪乱をうけている。少量の各時代の遺物が混入している。

Ⅲ層……褐色土層。

土質がキメ細かく、わずかに粘性を帯びている。無遺物の層である。

Ⅳ層……粘質茶褐色土層。

Ⅲ層に比べやや硬く、粘りも多い。無遺物の層である。

◎遺構・遺物

〈遺構〉

明確な遺構は確認できなかった。耕作土から無遺物層（第Ⅲ層）まで浅いため、あるいは後世の耕作により消失してしまっている可能性も考えられる。また、ゴボウ栽培による1mの深さにおよぶ幅20cmの溝が、きわめて著しく残り、攪乱の跡がなまなましかった。今回の調査で遺構が確認できなかった理由のひとつに、耕作の関係によりトレンチ設定箇所が限定されてしまった点があげられる。

〈遺物〉（第8図 1～2）

遺物はすべて細片で、量的にも乏しかった。しかし、完形品の石鐮が1点出土した。黒曜石製で、全体的に入念な仕上がりである。脚部の挟り込みが浅く、均整がとれている。全長2.8cm、最大幅2.0cmを計る。また附近から、扁平な打製石斧を1点採集した。これは、縄文後～晩期に大量に見られるものに近似しており、この時期の包蔵地の存在を期待させるに足る資料と言えよう。

②岩尻加武生古墳参考地（第7図）

〈層序〉

明確に、盛土とわかる堆積層は認められなかった。浅い腐植土の下は、明褐色土の軟らかい単一の層で、竹や雑木の根が一面に広がっていた。

〈遺構〉

言い伝えでは、石棺があるとされており、地主をはじめ附近の人々も当地を大切に扱うように古老から聞かされていたという。しかし、調査の結果は、石棺は見あたらず、ただ、石

I 層・

II 層

III 層

IV 層

V 層

◎

く

住

のべ

つて

まで

床面

の地

く

遺

した

○

当

にか

きく

物語

8～

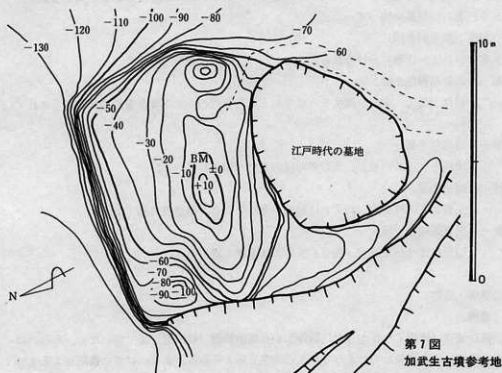
10～

いず

く反

○

大



棺の残骸ともとれる凝灰岩が2個露出していた。以上のように、主体部と断定できる遺構を確認することはできなかったが、第7図の地形図を見ればわかるように、墳丘そのものは完全ではないにせよ、遺構として遺されている唯一の手がかりである。やはり、当地は古墳である可能性が高いと思われる。

〈遺物〉

なし。

③諏訪原遺跡地区

当地区は、諏訪原遺跡のなかでも中心部に近い所に位置し、昭和 年の九州縦貫道建設の際の調査箇所から南へ約300m程しか離れておらず、本年の調査地区の中では、最も遺構・遺物の検出の可能性が高い地区と思われた。また、当地区は、県道（玉名―山鹿線）沿いということもあり、近い将来宅地化が予想される一帯である。

◎層序（第6図参照）

基本的にⅠ～Ⅴ層に分けられる。

I層……混砂褐色土層。

耕作土で少量の土器細片を含む。

II層……混砂褐色土層。

当地の現況は畑地であるが、かつての桑樹根あとの攪乱された土である。少量の土器片を含む。

III層……明褐色土層。

遺物を含むが、層の厚さは10cm以下である。層上部は、後世の攪乱により消失している。

IV層……褐色土層。

弥生時代の遺物包含層であるが、攪乱をうけている部分が多い。

V層……粘質黄褐色土層。

無遺物の層。地盤である。

◎遺構・遺物

〈遺構〉(第6図参照)

住居址4棟分と、多数のピット群を検出した。住居址はいずれも方形で、この時期に特有のベッド状遺構は見あたらなかった。現況は平坦であるが、層序を見ればわかるように、かつては、西側へ向かって傾斜した地形であった。このため、県道寄りの部分は表土から地盤まで浅くなっており、竪穴式住居の壁の立ち上りが低く削平されている部分もあった。また、床面はきわめて硬く、検出が容易であった。ピットは樹根跡との区別がつけ難く、県道寄りの地表から浅い層で検出したピットは特に区別が困難であった。

〈遺物〉(第8図、第10図32・33～第17図)

遺物は、弥生式土器を中心に多量出土した。これらの他に、縄文時代後晩期の土器が出土したほか、須恵器片も少量見られた。次にこれらの概要を記す。

○縄文式土器(第8図 7～15)

当地区から出土した縄文式土器は、図面の遺物番号7～15である。後期後葉から晩期初頭にかけてのものである。7は浅鉢と思われるものの口縁部で、深く内弯する頸部の上部で大きく外反し、ほぼ直立気味に口縁部が立上っている。内面は暗文が残り、仕上げの入念さを物語っているが、ややもろい。口縁部は、わずかに肥厚し三条の平行沈線をめぐるしている。8～9も、7とほぼ同様の器形の口縁部と思われる。ただ、7に比べ口縁部文様帯が短い。10～11は山形口縁をなす一群である。11の口唇部には、一部に縄文が認められる。12～15はいずれも、おそらく球体状に張る胴上部の文様帯である。摩消縄文の手法があり、頸部へ続く反転部分に、刺突文が一周している。

○弥生式土器(第10図～第17図)

大半が甕形土器または壺形土器に類するものであった。甕形土器について技法的に見ると、

ハケ目の条痕が明瞭に残るものと、そうでないもの、タタキ痕を有するもの、ハケ目とタタキの痕跡の両方を残すものなどがある。底部は、上部に比べて小さめの脚部をもつものと、砲弾状のやや尖り気味の丸底をなすものが見られる。壺形土器は、口縁部を欠失しているものが多いが、いずれも、短かめの口縁が、わずかに外へ開くものと、ほぼ水平に開くものがあるようだ。これらの他に、ジョッキ形土器、盃形土器、器台、高坏の一部などが見られた。

④松坂原遺跡地区

松坂原遺跡の中心部は、現朝日産業敷地内と北及び東側の隣接地であることは確実である。今回は昨年に続き、6回目の調査である。昨年、朝日産業敷地の東側隣接地に良好な包蔵地を確認したので、さらに東側へ続く部分を調査する目的でトレンチを設した。

◎層序は、前回調査区のすぐ近くということもあり、層の厚さの相違はあるものの、前回とまったく同様の様相を呈していた。

I～V層に分けられる。

I層……混砂褐色土層

耕作土である。少量の土器細片を含む。

II層……混砂褐色土層

色調はI層に近いが硬い。少量の土器細片を含む。

III層……
①黒色土層
②黒褐色土層

①・②とも縄文式土器と須恵器を含み、ほとんど同時期の層であると思われる。また、縄文式土器と須恵器が同一の層から出土するのは、縄文時代の層を古墳時代に攪乱したためである。

IV層……茶褐色土層

縄文時代の遺物含包層である。

V層……明褐色土層。

無遺物層である。さらにこの下には、暗褐色土層があり、このことは、これまでの調査で明白となっている。

◎遺構・遺物

〈遺構〉

遺構の検出なし。

〈遺物〉

遺物は、縄文時代後晩期の土器と須恵器を検出した。遺物の内容は前回とほとんど同じである。ただし、出土量そのものは、土器分布の密度から考えるに前回より希薄である。次に

これら
○を
遺構
調査し
は全
てい
素材
石を
○は
遺
口縁
をな
があ
二枚
なり
され
に外
く内
利な
「く
口縁
れる
は、
にヨ
大き
で表
なそ
で表
部の
気味
部を
同様
か
垂
多

これらの概要を記す。

○石器 (第8図 3~6)

遺物番号3~6のうち、3~4が打製石斧、5~6が石錘である。いずれも、これまでに調査した出土遺物と大差なく、縄文時代後期から晩期にかけてのありふれた石器である。3は全長11.0cm、最大幅4.7cmを計り、刃部の整形は粗雑である。4は頭部と刃部先端を欠失していると思われ、残存長6.7cm、最大幅5.7cmを計る。5はやや細長い楕円形の薄い自然石を素材として用い、両端を深く打ち欠き石錘として用いたもので、6は、円形に近い薄い自然石を素材とし両端を浅く打ち欠き決り込みを設けている。

○縄文式土器 (第9図)

遺物番号16~27が縄文式土器である。出土したもののうち、文様の描かれているものや、口縁部あるいは底部のように器形がある程度推定できるものなどを選別した。16は山形口縁をなし、頸部が大きくくびれる器形となっている。口唇部に沿うように二条の並行する沈線をあり、その間には擬似縄文を施している。施文具はアカガイやハイガイなど放射筋のある二枚貝で、これらの背を押圧して施文している。内外には暗文が全面に認められる。胴はかなり張る器形となろう。17も16に同じく、山形口縁をなし、器形も16に類似するものと推定されるが、器壁が16に比べて薄くやや小ぶりになると思われる。内外に暗文が認められ、特に外面の研磨は入念である。18は、きわめて入念な作りの黒色研磨土器である。頸部は大きく内弯し、外反する上端からほぼ直角に口縁部が立ち上がっている。口縁部には、先端の鋭利な細身の棒かへらを用い、口唇に平行に二条の沈線をめぐらしている。胴部との接合部は「く」の字形に屈曲するものと思われる。器形は浅鉢形となろう。19は、深鉢の口縁部で、口縁部上端を一部欠いている。口縁部には、二条の平行沈線が施され、内外に暗文が認められる。内面の口縁部と頸部の接合部には、ヨコ方向のへらけずりが明瞭に残され、その上下は、ナデにより整形されている。20~22は、ほとんど同タイプの器形となると推定され、主にヨコ方向のへらナデによって整形されている。23は無文である。いわゆる内弯する頸部、大きく外反する先端に口縁部が統かず、そのまま頸部の先端が口縁となっているような器形である。文様帯のある口縁部が省略された器形と言いかえることもできる。全体形は浅鉢となると推定される。胎土・焼成とも良好で、内外に暗文を有する。24は23と同じ無文の土器であるが、山形口縁をなし、外傾しつつ直線的に口唇部に至っている。おそらく、頸部と胴部の接合部は「く」の字形となり、胴部はやや張る形状となろう。口唇部は、わずかに内反気味である。全体形は、16と似た器形になると思われる。25~26は短かい内側にくびれた頸部をもち、その先端は外反し、その上にごく短かい口縁部がある。見ようによっては、23と同様、文様帯のある口縁部が省略された形ととれないこともない。胴部は、頸部からゆるやかにカーブしつつ底部へ至ると推定される。浅鉢である。27は無文であるが、口縁部はほぼ垂直に立ち上がっている。また、内外の器面調整はきわめて粗雑なヨコナデである。胎土に多くの砂粒を含んでいる。28~31はいずれも平底の底部である。28は外面の一部に暗文が認

く、特に
縄文時代の
く、縄文
る。今

められる。また30は、わずかに上げ底気味となっている。

○須恵器（第18図～第19図）

いずれも、大甕の破片である。外面は、格子目のタタキ調整が主体で、内面は、同心円か平行目のオサエによる痕跡が明瞭に残っている。外面の調整には、他に例えば74・77・78・81・84などのような調整も見られる。大甕の破片の他には、器台の脚部と思われるものも出土した。85と86である。2点とも、やや焼成があまく、波状の沈線文と一条の隆起線文を施している。

四、ま と め

今年度の調査は、岩尻辻原区の包蔵地の確認とその分布把握を主体に調査日程を組み、他に三箇所発掘調査を実施した。これらの結果を次に記述しまとめとする。

①岩尻辻原地区

岩尻辻原区からは、遺構は検出されず、遺物も少なかった。しかし、黒曜石製の石鏃が、攪乱されていない層から出土した。このことは、周辺一帯のいずかかに包蔵地が存在する可能性を示している。同区には全部で3本のトレンチを設定開掘したわけだが、これらの中には、包含層と言いつける層が見あたらなかったことが心残りである。機会を見て再調査を実施したい。

②岩尻加武生古墳参考地

埋葬主体部の確認はできなかった（消失していた）ため、古墳であることの確証は得られなかったが、地形や言い伝えなどを総合して考えると、やはり古墳である可能性が高い。

③諏訪原遺跡地区

住居址4棟と多くの遺物を検出した。諏訪原遺跡の中でも、この地区は一帯の分水嶺にあたる所で、地盤まで浅く、特に道路寄りの部分の遺構は、攪乱が目立った。これらの結果により、従来までの情報に加えて、住居址群の広がりなど貴重な知見が得られた。

④松坂原遺跡地区

同地区の遺物の出土具合などから考えると、工場敷地から東へ移るほど遺物の出土は希薄となることが明白となった。ただし、須恵器片の出土量は差がなく、縄文時代の包蔵地と古墳時代の包蔵地の中心部は多少ずれている可能性がある。当地区は、陽あたりが良く、水はけも良好で、さらに附近には湧水もあることなどから、生活の場として絶えず利用されていたことは十分予想される。当地は、周囲よりも高台となっているため、遺物包含層までが浅

く、特に須恵器を含む層からは、縄文時代をはじめとして各時代の遺物が見られ、純粋な古墳時代の包含層は見つかっていない。また、量的に弥生時代・中世の遺物などは極端に少なく、縄文時代の包含層が形成された後、古墳時代の人々の足跡が刻まれていったと考えられる。今後は、出土した遺物などを参考に、遺構の存在を明白にする必要がある。

◎菊水町出土人骨の鑑定結果について

九州大学医学部解剖学教授 永井昌文

- | | |
|-------------|------------|
| 1. 北赤穂原石棺人骨 | 1体 |
| 2. 柳林1号人骨 | 1体 |
| 3. 若園貝塚人骨 | 3体 その他破片若干 |
| 4. 堂の上墓棺人骨 | 1体 |

§ 北赤穂原石棺人骨

保存状態

1個体分の約半量が残存している。赤色顔料の付着はない。

頭骨では頭蓋冠が残り、右側前頭部から顔面さらに頭蓋底のあたりは少量の骨片しか残存していない。下顎骨も左半側がよく残り、右半は破砕されている。

軀幹骨では頸椎から仙骨に亘って量的には約1/3遺存している。

上肢骨では右側の上腕骨の下2/3と同側の尺骨上2/3が残り、左側では殆ど腐蝕し前腕の小片が見られるだけである。

下肢骨では両側ともに恥骨を欠く寛骨と、同じく両側の上2/3の大腿骨があり、脛骨も右側は上2/3が残るが左側は骨体部の小片が見られるのみである。

残存歯式	8 7 6 5 4 / 2̣ 1̣	/ 0 3 4 5 0 //
	8 / 6 5 4 3 / 1̣	/ 2̣ 3 4 5 6 7 x

○…空歯槽 ×…歯槽閉鎖 /…歯槽欠損 △…歯根のみ残存
()…未萌出 ・…遊離歯

埋葬姿勢 俯臥屈葬

残存骨と発掘時の実測図とを照合すると、当時としては特異な俯臥伸葬である。頭骨では石棺の小口が露出した際、学童によって攪乱を受けたそうで判然としないが、四肢・骨盤の配置は正しく俯臥の位置である。これが凶葬的な性格のものであるかどうか今後注意すべきであろう。

推定年齢 成年

歯牙の咬耗はMartinの1度乃至2度であり、冠状縫合に癒合は見られない。腰椎体に贅骨の発生も見られない。

推定性別 男性

大坐骨切痕の形状は明らかに男性のものであり、乳様突起は大きく、外後頭隆起も著しい。四肢骨も太く頑丈である。

推定身長 166cm前後

発掘時、辛うじて実測された右大腿骨の最大長は45乃至46cmと読まれているので、それよりPearsonの算式に当てはめると上記の如き値となる。

その他

抜歯風習の痕跡は、顎骨に欠損があるので明確には言えないが、無いほうの可能性が高い。

特記事項

左頭頂骨内面に、中硬脳膜動脈圧痕の2枝を横切り、長径34mm、短径14mmの楕円形の陥凹がある。この部分の内板は無く板間層の粗い面が露出している。そして中央部に径3mmほどの小孔が開き外面に通じている。あたかも内板さらには板間層の骨組織が次第に吸収された、が如き様相を呈する。しかし外面においても、内面陥凹周縁においても骨組織増殖など格別の変化は見られない。といって発掘調査以後の新しい損壊とも思えない。今はこの異常を究明し得ないが今後の為に記録して置きたい。

§ 柳林1号人骨

保存状態

頭骨は細片が極く少量残っているだけであり、歯も殆ど歯冠だけ17本遊離して得られている。

残存歯式
$$\begin{array}{ccccccc|ccccccc} \dot{8} & \dot{7} & \dot{6} & \dot{5} & \dot{4} & \dot{3} & // & // & // & \dot{3} & \dot{4} & \dot{5} & \dot{6} & \dot{7} & // \\ \hline // & \dot{7} & \dot{6} & \dot{5} & // & // & // & // & // & // & \dot{5} & \dot{6} & \dot{7} & // \end{array}$$

軀幹及び四肢の骨は、頭骨に比べるとよく残っているが全量の約半分程度である。長骨の主要なものも揃っているが、いずれも完全ではない。土塊が墓棺内に落込んだと言うからこれも影響しているらしい。全体に赤色顔料の付着は認められない。

推定年齢 成年

歯牙の咬耗度のみからの推定であるが、殆どがMartinの1度である。

推定性別 男性

大坐骨切痕や仙骨底の形状から男性であることは確実である。

推定身長 160cm前後

両側の不完全な脛骨を相互に補って、その最大長約34cmを推定し、それを更にPearsonの算式にあてはめたものである。

その他

抜歯風習の痕跡は、歯槽欠損のため全く不明である。

§ 若園貝塚1号人骨

保存状態

細片に砕かれている部分もあるが、全体に比較的良好に保存されて居て、全骨格の約3/4量が残っている。

頭骨は、顔面骨の破砕が著しく、この部分の復元は困難であった。

軀幹骨は細片が多く、四肢骨の主要な長骨は骨端を欠くものもあるが、一般によく保存されている。

赤色顔料の付着は認められない。

残存歯式	////x x O 1	OOx x x x //
	x O O 5 4 3 //	/ 2 3 4 5 6 7 /

○…空歯槽 x…歯槽閉鎖 /…歯槽欠損 △…歯根のみ残存
()…未萌出 ・…遊離歯

埋葬姿勢 仰臥屈葬

発掘の際の実測図と残存骨とを照合すると、仰臥屈葬である。但し、両肘は伸ばし、膝関節は強く屈して居る。

推定年齢 成年

残存歯式に見る下顎大臼歯はMartinの3度乃至4度の著しい咬耗を示すが、小臼歯は2度程度であり、頭蓋縫合の癒合も殆ど進行していない。従って咬耗度と縫合癒合の進行が平行して居ない。これは縄文時代の食生活における咬耗の進行が年齢に比して著しいと見て成年(30歳代)を推定した。

推定性別 女性

寛骨における大坐骨切痕の開きは明らかに女性のものであり、頭骨における諸特徴(眉弓の隆起、乳様突起の大きさ等)から見ても女性であることは確実である。

推定!

ほぼ?

は普通

其の(

頭形

抜歯

鎮して)

§ 老

保存

頭骨

り、顔

残存

赤色

推定

頭蓋

は両側

推定

頭骨

其の

頭形

抜歯

められ

習的な

また

く当時

推定身長 147.7cm

ほぼ完全な左側脛骨の最大長310mmよりPearsonの算式で推定した。当時の女性身長としては普通である。

その他

頭形示数は82.4を示し短頭形である。

抜歯風習の痕跡については、上顎犬歯々槽に閉鎖が見られるが、両側ともに隣接歯槽が閉鎖して居り、歯根膜周囲症による病的脱落の可能性が高い。

§ 若園貝塚 2 A 人骨

保存状態

頭骨のみが残って居り、それは下顎がなくCalvariaのみである。右側頭部に大きな欠損があり、顔面は破壊されて復元困難である。

残存歯式 (8) 7 6 5 4 0 0 0 | 0 × 0 4 5 6 7 (8)
略号説明は1号と同じ。

赤色顔料は付着はない。

推定年齢 成年 (20歳程度)

頭蓋冠の主要縫合はすべて未癒合であり、既萌出歯の咬耗はMartinの1度で、第3大臼歯は両側ともに根尖未化骨・未萌出である。

推定性別 女性

頭骨全体がやや小さく、前頭部は膨隆し、眉弓の隆起は弱く、乳様突起はやや小さい。

その他

頭形示数は83.5を示し短頭形である。

抜歯風習の痕跡は、右側々切歯の歯槽が閉鎖し、隣接歯槽に捻転・傾斜があり、歯隙が狭められて居るので、若年期における同切歯の脱落があったことは判るが、それが人工的・風習的なものであったかは、この例だけでは確言し難い。

また、冠状縫合に沿い、その後方に幅20mmほどの圧溝を認めるが、これが従来言われる如く当時の運搬法に起因するものかどうか今後注目しておきたい。

§ 若園貝塚2B人骨

保存状態

底部を欠く頭骨 (Calva) と上・下顎骨とが残り、いずれも不完全である。

残存歯式 () 7 6 5 4 0 0 0 | 0 0 3 0 5 6 7 ()
() Δ 6 0 // // | 0 0 0 4 5 6 7 ()

軀幹骨は破砕した脊椎骨・肋骨などが全量の約1/4程度残って居る。四肢骨では左側の腸骨が辛うじて残り、大腿骨以下の下肢骨はない。恐らく耕作によって失われたのであろう。残って居るのは右側の肩甲骨から前腕骨までと、左側の肩甲骨及び腕尺関節に關与する2骨の破片である。

推定年齢 成年 (20代の初期)

頭蓋冠の3主要縫合には未だ癒合が見られない。既萌出の歯牙の咬耗はすべて1度であり、智歯は上下両側ともに未萌出である。また、椎体や腸骨翼に骨端での離開が認められ、上腕骨頭にも未だ明確な骨端線が残るが、他の長骨の骨端は既に癒合しているところから、20代も初期と推定した。

推定性別 女性

頭骨全体がやや小さく、前頭骨の膨隆強く、外後頭隆起は強く、乳様突起は小さい。

推定身長 146.1cm

完形で残っている右側上腕骨最大長からPearsonの算式によって推定したものである。

その他

風習的抜歯の痕跡は残存歯式から無いと言ってよいであろう。

頭形示数は79.4であり短頭に近い中頭形である。

前頭部には完全な前頭縫合が残っている。

§ 若園貝塚出土散乱骨

この貝塚の試掘の際に採取された14袋の内容の骨片を検した結果は次の通りである。その1袋にはC区・C-1 Trench・混土貝層、昭和56年1月13日とのラベルが封入されていた。少なくとも4個体分の人骨を含み、その内訳は下記の如くである。

熟年・男性 1体

成人・性別不明 1体

6歳程度の小児 2体

なお、猪骨も若干含まれていた。

5 堂ノ上墓棺人骨

保存状態

このような小児の骨では、やや稀有なことであるが、全身骨がほぼ完全に残存している。但し長骨及び脊椎骨において骨端はすべて離開している。なお、顔面に赤色顔料の付着が認められている。

残存歯式	() 7 6 5 4 3 2 1		1 2 3 4 5 6 7 ()
	() 7 6 5 4 3 2 1		1 2 3 × 5 6 7 ()

埋葬姿勢 仰臥屈葬

推定年齢 小児 (12歳程度)

以下は両側及び上下顎に共通の所見である。智歯は未萌出、第2大臼歯は咬合面に達しているが未だ咬耗は見られない。第2小臼歯は同面に達していない。

推定性別 不明

未成年骨であるため推定は困難である。

その他

風習的抜歯の痕跡と思われる所見はない。

以 上



第1図 昭和61年度調査地区位置図

第2图 岩房調查地区位置图





第3図 調査地区位置図

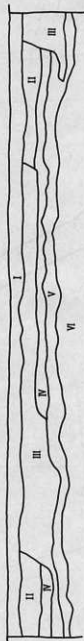


第4図 松坂原遺跡調査トレンチ位置図

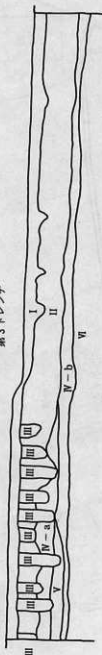
第1トレンチ



第2トレンチ



第3トレンチ



岩尻辻原地区

第1トレンチ～第3トレンチ

I層…混砂黒褐色土層

II層…暗褐色土層

III層…褐色土層

IV層…粘質茶褐色土層 { IV-a (軟)

V層…粘質暗褐色土層 { IV-b (硬)

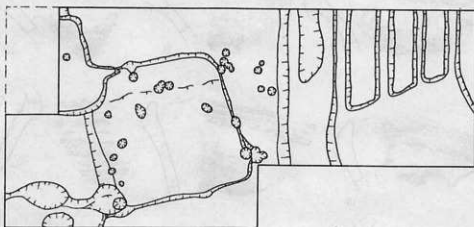
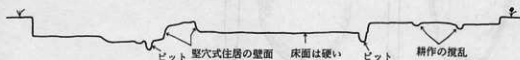
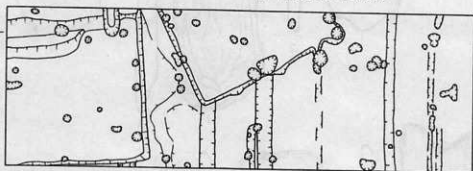
VI層…粘質明褐色土層

第5図 岩尻辻原地区層序断面図

0 2 m

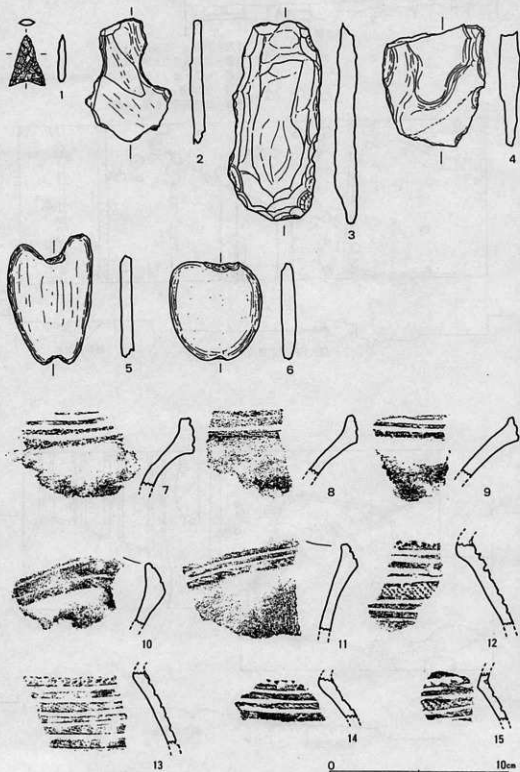


- I層…耕作土・混砂褐色土層
 II層…混砂暗褐色土層（攪乱）
 III層…褐色土層（I層に近いが、ややキメの細かい土層）
 IV層…（包含層・弥生時代）
 V層…粘質明褐色土層（地盤）

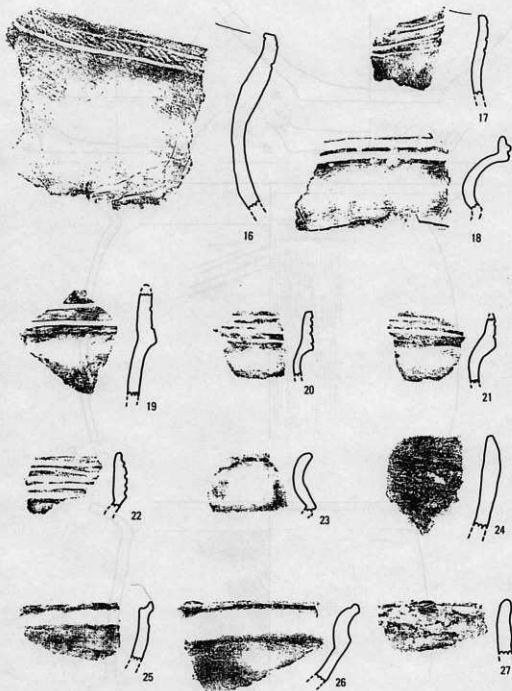


第6図 諏訪原遺跡地区層序及び遺構・遺構断面図

0 4 m

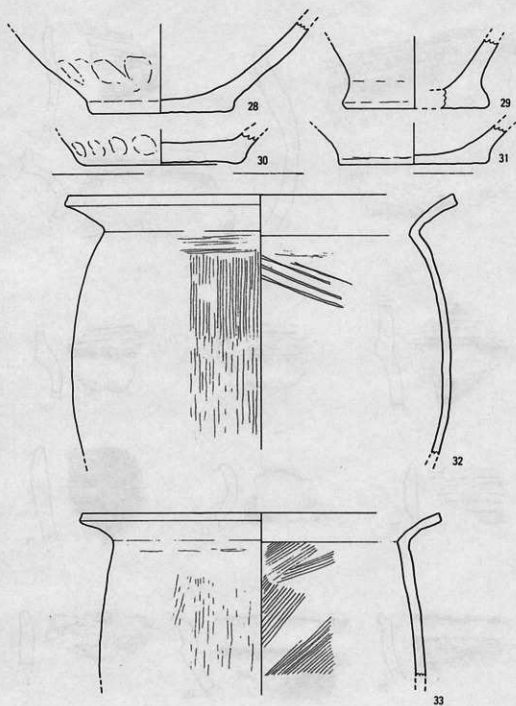


第 8 圖 遺物実測図



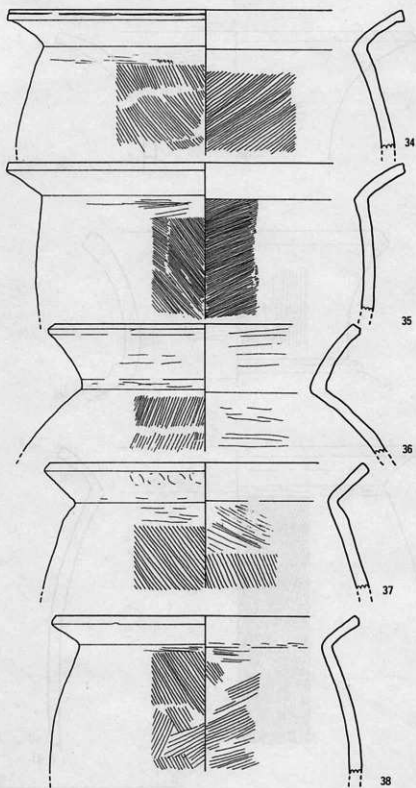
0 10cm

第 9 图 遺物実測図

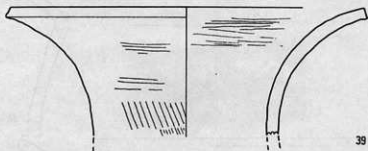


0 10cm

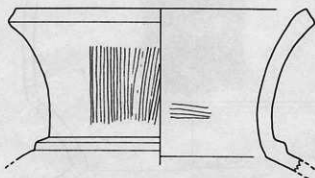
第10図 遺物実測図



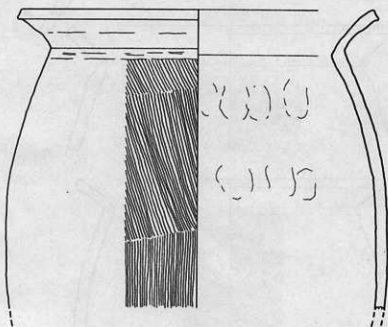
第11圖 遺物実測図



39



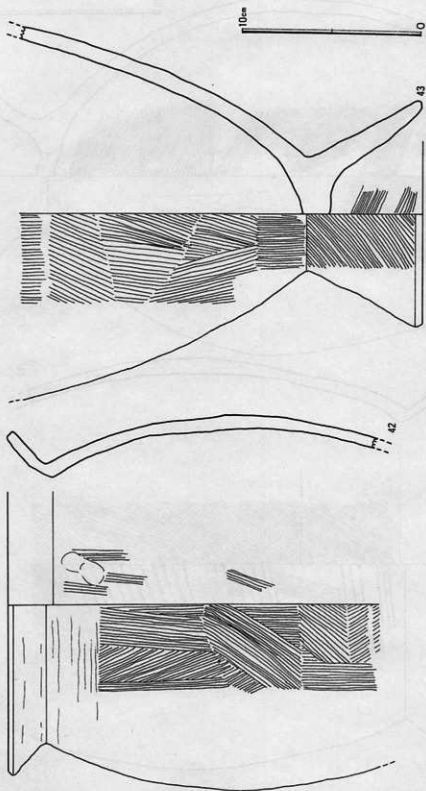
40



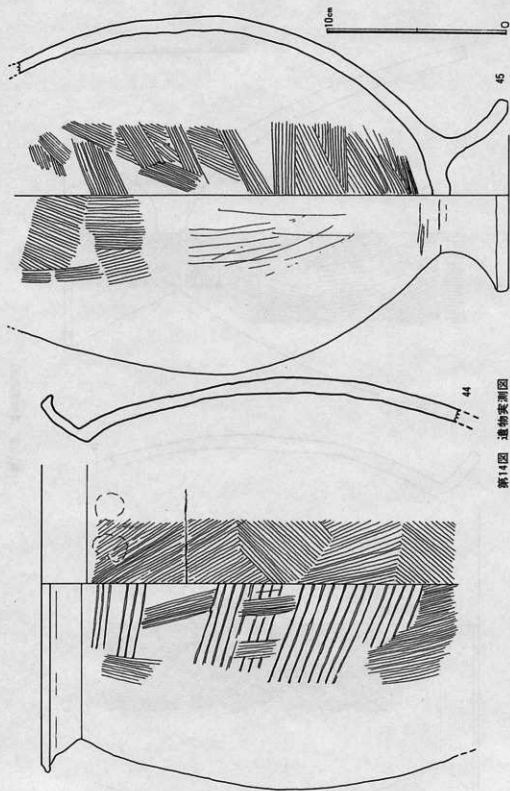
41

0 10cm

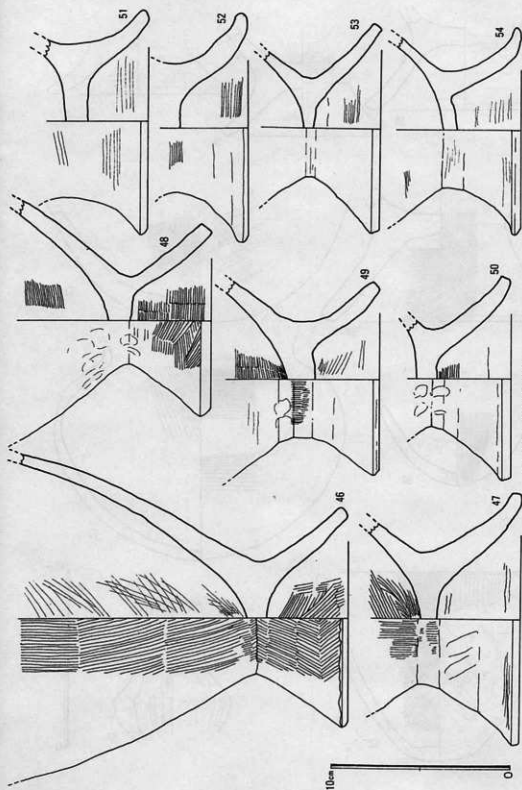
第12図 遺物実測図



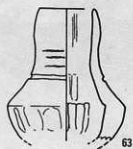
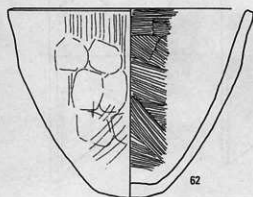
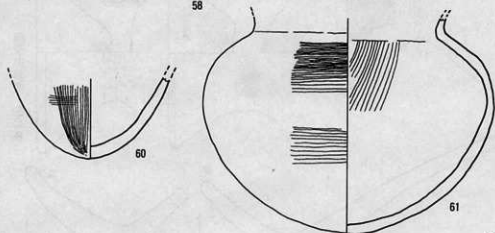
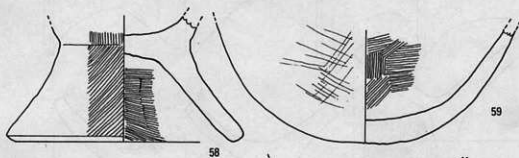
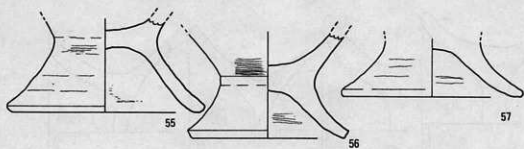
第13圖 遺物実測図



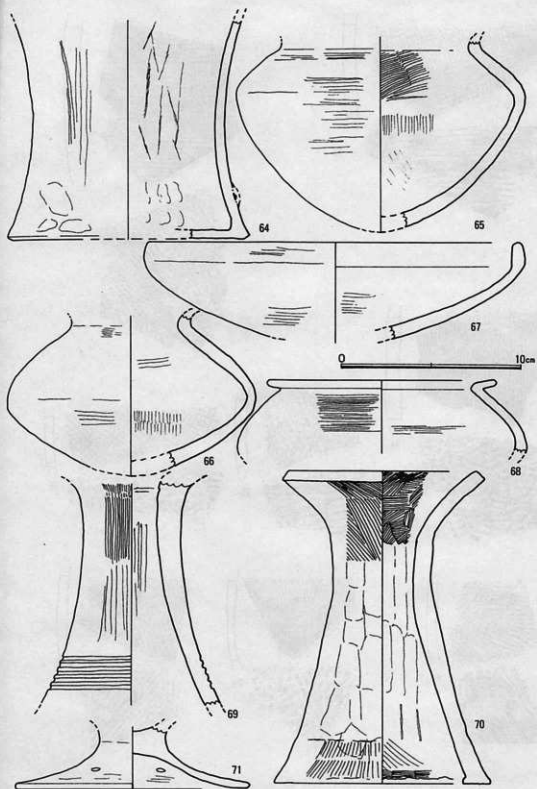
第14圖 遺物実測図



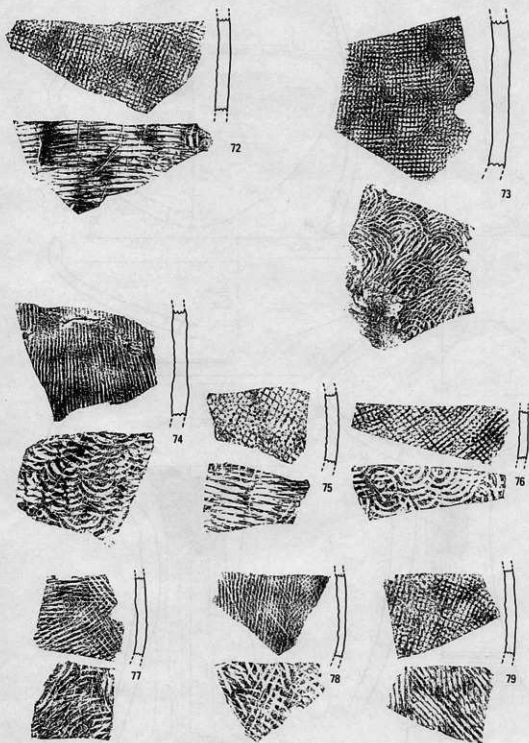
第15图 遗物实测图



第16图 遗物实测图

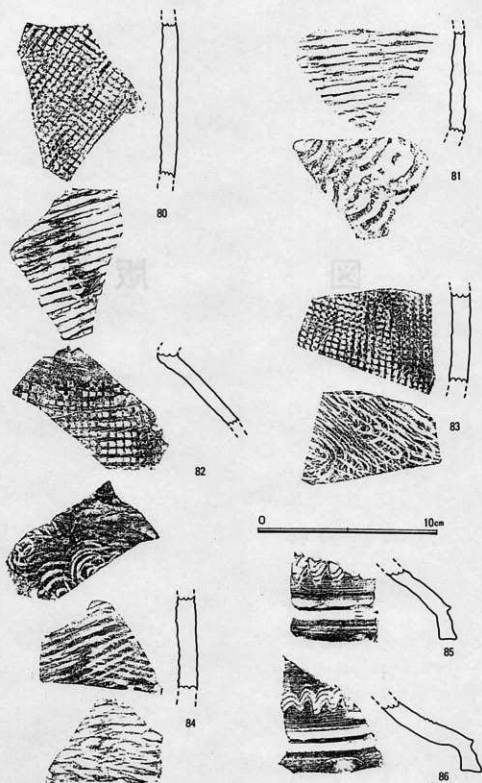


第17图 遗物实测图



第18図 遺物実測図

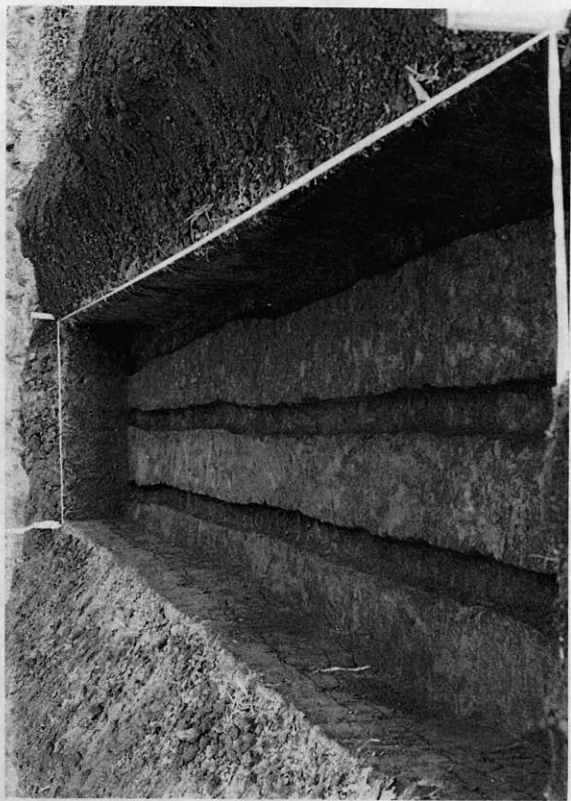
0 10cm



第19圖 遺物実測図

図

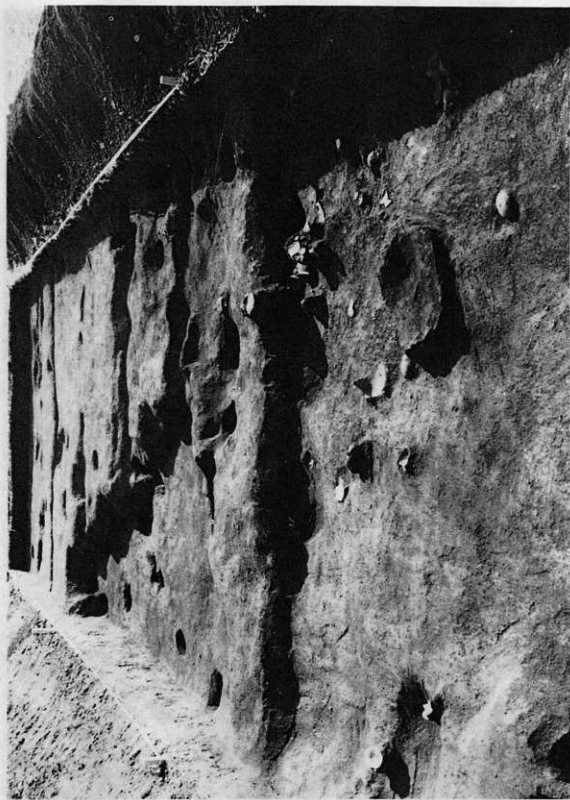
版



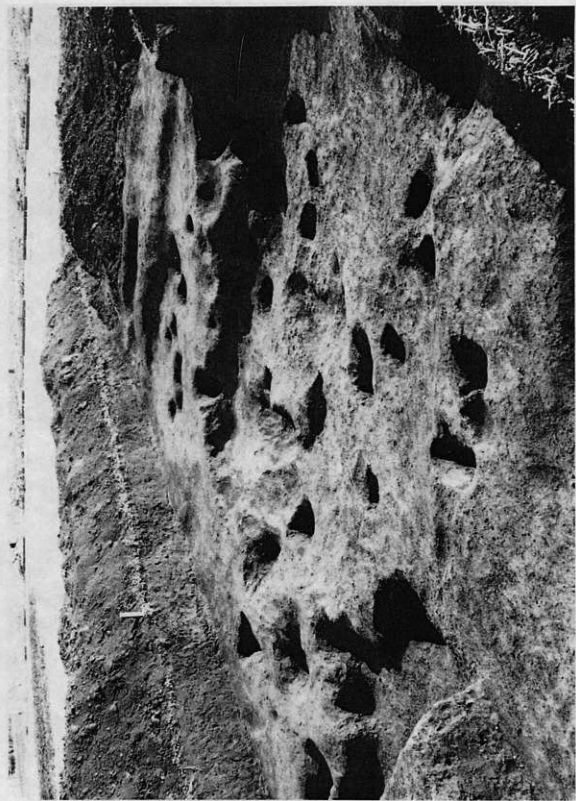
図版一 岩尾辻原地区第一トレンチ



圖版 2 泥炭地生石叢參考地



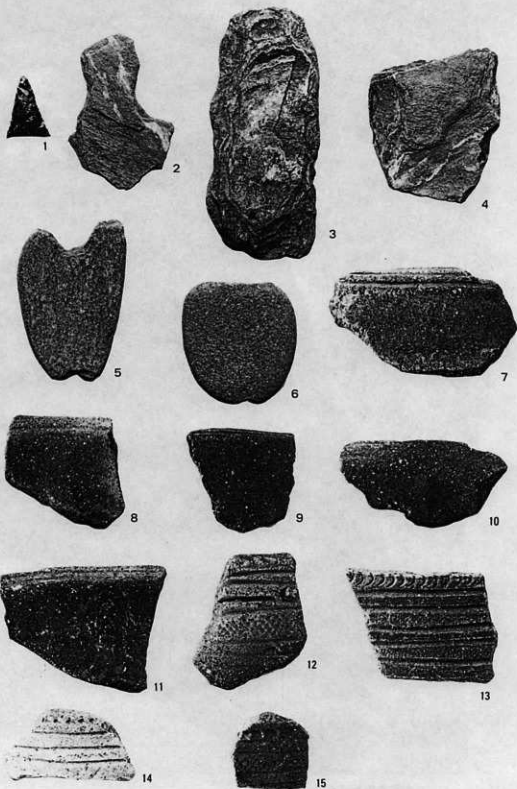
図版 3 原防原遺跡遺構・遺物出土状況

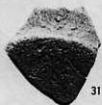


圖版 4 預防原遺跡遺構出土狀態



圖版 5 松坡底遺址層序出土狀態

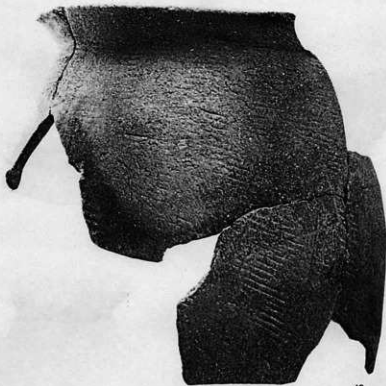




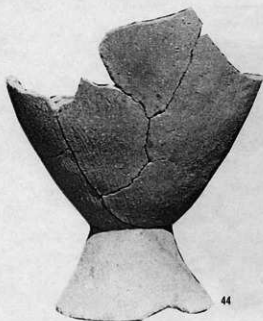




42



43



44



45



46



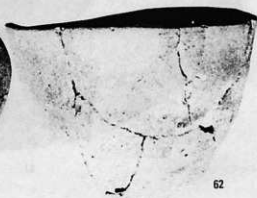
47

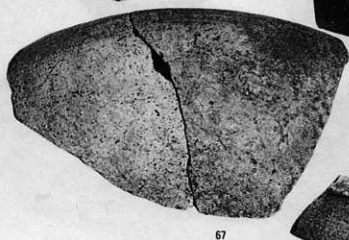
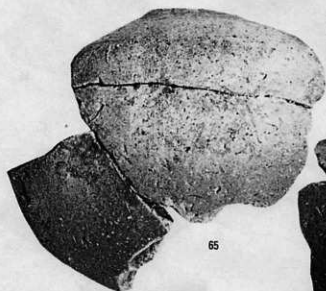


48



49



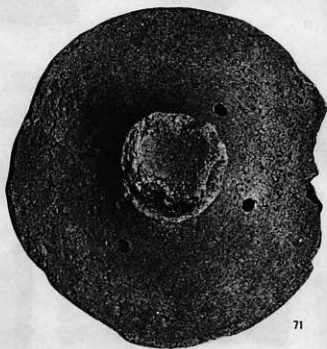




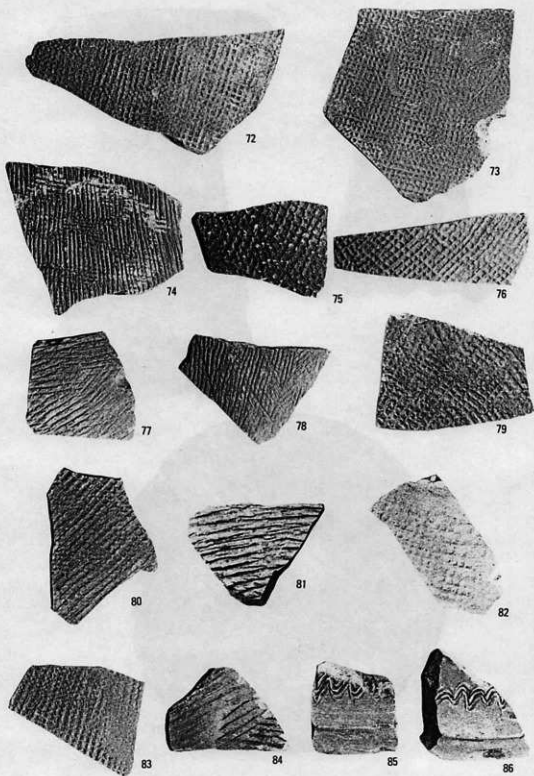
69



70



71



菊水町文化財調査報告 第10集

岩 尻

昭和62年3月31日

編 集 菊水町教育委員会 文化課

発 行 菊水町教育委員会
TEL. 096886-3131・3132

印 刷 下 田 印 刷

文
化
課

No. 103/6

A-34